

7.派遣職員



未曾有の大震災・津波からの復興を進めるには、あまりにもすべきことが多く、それは大船渡市役所においても同様でした。

「銀河連邦」をはじめとする自治体間の連携・協力等をきっかけとして、全国各地より大船渡市役所へ派遣支援をいただきました。

そうした、大船渡市へ派遣された職員のインタビュー／寄稿から、大船渡市で復興関連業務に就いていた時の記憶や外部から見た大船渡についてお話をお伺いしました。

(1) 震災以前の交流都市からの派遣支援

神奈川県相模原市より派遣
小池稔氏、水内智氏、兼杉龍一郎氏、安藤裕之氏、一柳幸弘氏

震災直後の支援から長期職員派遣へ

東日本大震災の前から大船渡市とは銀河連邦での交流があり、発災後すぐにトラックに支援物資を積んで相模原市から送りました。また、発災直後から人的支援もスタートし、支援物資の集積や保健などの業務を行っていました。

その後、短期の職員派遣として、平成23年度中は2週間交代で6人の職員を送り、支援金の支給やガレキ撤去、福祉業務などの支援を続け、また7月からは、中長期の災害復興業務への支援ということで職員を1～2年間の任期で派遣することになりました。

中長期の災害復興への職員派遣のきっかけは、震災1か月後の4月に相模原市の加山市長が被災地視察を行ったことでした。実際に被災直後は、まだ大船渡市の技術職員は道路等の復旧やガレキの撤去、仮設住宅の建設に手一杯のようで、大船渡市の戸田市長と面会した中で、災害復興の



■右から、一柳氏、小池氏、安藤氏、兼杉氏

業務を行うまちづくりに関する経験を持った職員を支援して欲しいという話があり、土木の専門職員を派遣することになりました。

派遣職員としての仕事、派遣職員だからこそその仕事

長期派遣されてからは、復興委員会をはじめ、いろいろな会議に出席させていただきました。復興交付金に係る国との協議に出席した際には、東北の人は穏やかなところがあるのか、「もうちょっと要望の方がよい、こんな被災なのだから」ということもあって、私たちが強く要望したこともありました。

災害危険区域の指定に係る業務では、津波シミュレーションによる浸水深さの予測や浸水による建築物の規制等を担当しました。住民説明会では、我々派遣職員が説明することで、市職員のように「あまりにも地域や被災者のことを知っている」ということを意識しないで進められたことはよかったのではないかと思います。市職員の地元であると会議のメンバーが互いにみんな顔見知りということもあります。言いにくいことや公正・公平な判断が難しい場面もあります。こうした場面では「派遣職員をうまく使って下さい」と言ったこともありました。ある意味、無責任な言葉になりますが、「嫌な所は派遣職員に任せたらいい」と割り切ってしまうのもよいのではないかと感じました。

住民説明会には必ず戸田市長が出席し、復興の最前線で市民の声を受け止めていました。津波のシミュレーションの結果に関して、被災者への混乱を招くことから「岩手県のシミュレーション結果の公表を待ってから市民への説明を行ってはどうか」と市長に話をした時、「市が持っている情報はいち早く市民提供するべきだ」、「情報を隠すな」という前向きな姿勢でした。こうした姿勢によりスピード感を持って仕事を進めることができ、感謝しています。

めげない人々、優秀な人材、 経験を次に生かして

大船渡市では、被災している人たちが意外とめげていない。防災集団移転促進事業の説明会では、被災して仮設住宅に住んでいる人がほとんどでしたが、市が説明するまちづくりについて積極的な意見や議論をしていただきました。これは大船渡の風土“ガンバッペ”の精神なのかなと思いました。東北地方の人は地域の団結が固く、外からの人を受け入れない雰囲気があるのかと思っていたら全然そうではなくて、快く受け入れていただき、生活もしやすかったですし、説明会でもあまり喧々諤々という場面はなく助かりました。

大船渡市職員は、行政手腕という大げさですが、事務処理のレベルが高く、とにかく優秀な人が多いです。ただ、都市計画やまちづくりの経験が少なかったのかなという印象もありました。国や岩手県、あるいは業者と協議するということに場数を踏んでいないから、どうしてもそうなった時の対応ができない。今回、災害復興を行うことで様々な経験や知識を積まれたと思います。毎年、各地で大規模な災害が起きています。いつどこで甚大な被災があるかわかりません。そうなった時、今度は逆に支援者という立場で、これまでの経験や知識を活かし、活躍していただけたらと思います。

(2) 経験の共有を密にさらなる自治体間連携を

千葉県山武市・秘書課より派遣 木津川 芳秀氏

東日本大震災により私の本務地である山武市内においても、地震に伴う液状化や津波により家屋や道路等のインフラに大きな被害を受けました。

そのような中、市内の復旧・復興に全力で取り組みつつ、震災で甚大な被害を受けた東北地方の自治体の復旧・復興の支援を行うことにより、日本全体の復興を後押ししていくという当時の市長の強い思いの下、職員派遣の受入れ先を探していたところ、大船渡市から職員受入れの承諾をいただき、平成23年10月から約3カ月間という短い期間でしたが、商工観光部商工観光物産課において被災した自営業者の復旧・復興に係る業務に従事しました。

具体的な業務の内容は、被災した中小企業者に対する仮設店舗等の整備事業を行っていた(独)中小企業基盤整備機構に対して、仮設店舗等での事業の再開を希望する自営業者の要望を集約・調整して整備の要請を行うものでした。



店舗や作業場を失った多くの事業者が事業の早期再開のため、一刻も早い仮設店舗等の整備を望んでいる中で、建設用地の選定や業種ごとに異なる施設の規模や仕様の検討に時間を要すること、また、私自身の業務に対する経験及び大船渡市についての地理的な知識が十分でないことにより、事業者の早期再開への思いに適切に応えられているのか、なにより、大船渡市の職員の負担を結果的に増やしてしまっているのではないかと、心苦しい思いでした。

ただ、そのような中でも、店舗や宿泊施設が少しずつ営業を再開していく光景に現地で立ち会えたことは、業務を行う中で何よりの励みになるとともに、その復興に向かう姿に勇気づけられました。

東日本大震災の災害対応にあたる多くの派遣職員を目の当たりにしたこと、そして、自治体の職員数が減少傾向にある中で、年々激化している気象災害へ対応するため、自治体間連携の重要性は今後ますます高まることが想定されます。今回の大船渡市への派遣を経験し、迅速かつ効率的な自治体間連携を図るためには、派遣する側と受ける側の自治体で同じイメージを有することが必要であり、そのためには、連携自治体相互での災害対応の経験の共有と派遣職員へ円滑に業務の引継ぎを行うために業務の処理方法の統一を図ることが重要であると考えます。



■山武市のゆるきゃら「SUNムシくん」

(3) 大船渡市の共同意識の高さに感銘、復興の経験を共有していきたい

東京都災害復興局より派遣 光富 正敏氏

赴任のいきさつと担当業務

東京港防災事務所長を務めた後退職していたが、震災のすごさをTVで見て、何か手伝いをしたいと思った。そこへ丁度東京都の募集があり、選考試験を経て任期付職員として採用され、赴任した。

漁業集落防災機能強化事業を中心として、計画立案、復興庁との折衝、用地交渉、工事設計、現場監督に従事した。

大船渡市の共同意識の高さに感銘、苦労は「地名」

近隣の共同意識が高く、市民が復興まちづくりに自ら参加する熱意に感動した。また、綾里地区、浦浜・泊地区、崎浜地区、碁石・泊里地区の復興まちづくり委員会に参加できたことはよい経験となった。

市職員も大変な経験をした直後にも拘らず士気が高く、知識・能力に感心した。



■水産課で漁業集落の復旧・復興業務にあたった



赴任して最初に苦労したのは、「読み」が分からない地名が多いこと、高齢者の言葉が聞き取れないことだったが、段々慣れて来た。雪道運転や雪かきも大変だった。

綾里地区の仮設住宅で暮らしたが、隣人に魚や料理をいただいたりして、助けられ励まされた。

派遣を通じた復興の経験の共有はお互いの財産になる

業務では、復興事業予算獲得のための大量な資料づくり、深夜に及ぶメールでの復興庁との折衝、用地交渉が大変だった。用地交渉や工事の合意形成には、まちづくり委員会や仮設住宅での人間関係が大いに助けとなった。

災害のような緊急事態に、自治体間で人的・物的に協力すること、他の自治体が経験したことのない対応を共有することは、今後も可能な限り実施したい。

災害復興では、従来の枠組みでは対応できないことが多い。復興事業を進めるため、現場で困っていることを国につけることにより、例えば、土地交換への非課税措置など法令改正をすることができたことは記憶したい。

(4)

日頃の「つながり」を紡いでいくことこそ、いざというときの「絆」に

長野県佐久市より派遣 清水 賢二氏



様々な被災者の苦悩に直面

長野県佐久市は大船渡市と友好都市の関係であることから震災直後から復興支援のため人材を派遣しており、私は平成23年と平成27年の二度にわたり派遣されました。

平成23年は7月からの三ヶ月間、税務課に配属され主に災証明書の発行事務に携わりました。

当時すでに津波被害の調査はほぼ完了しており、高台にある住宅の地震被害の調査がメインとなっていました。報道による津波被害の印象が強かったのですが、地震の被害で苦労されている人もいたことを実感しました。また、地震被害については、当時「一部損壊」認定では国の支援を受けられない一方、家の修繕は必要となる中で、被災した人たちの「津波で家を流された人よりはマシなのだけど…」と苦悩されている姿に、もどかしさを感じたことを覚えています。

派遣中の暮らしの拠点は、前半を吉浜にある「弁天荘」でお世話になり、方言100%の明るい女将さんが「養殖物が全て流されてしまって何も無いけど」と言いながらも、その日捕れた魚でおいしいお料理を出してくださいました。初めて食べた塩ウニの感動は今も忘れません。後半は大船渡でいち早く営業を再開した「ホテル福富」で過ごしました。復興に従事する人の拠点となるホテルの早期再開は復興事業を推し進める中で重要なことだったと確信しています。

一丸となって防災集団移転促進事業に尽力

平成27年度は一年間災害復興局復興政策課に配属され、防災集団移転事業に従事しました。

末崎地区の担当となり、宅地造成を終え分譲手続きを行う時期でした。地域の皆さんは、長い仮設住宅生活でストレスがあったはずですが、他県から派遣された私に対しても温かく迎えてくださり、また、職場でも地元職員を中心に派遣組とチーム一丸となり取り組むことができました。

災害時だけでなく 友好都市の「つながり」があればこそ

特に、私にとっては前回の派遣時や、友好都市としての交流を通じて知り合った職員がいたことで、派遣当初から馴染めていけたことが、仕事をするうえでも大変励みになりました。

プライベートでも地元職員に大変お世話になり、盛町灯ろう七夕まつりや、消防団、スネカ等の行事に参加しました。また、仮設の復興商店街をはじめ、飲食店も次々再建され、海なし県民としては夢のような豊富な海の幸を堪能し、復興支援に来た身でありながら、日々貴重な経験ができました。

それから4年、日本各地で甚大な災害が発生し、令和元年10月には台風19号により佐久市も大きな被害を受けました。復旧のため多くのボランティアを必要とする中で、大船渡市の職員も駆けつけてくださいました。

こうした助け合い・支えあいを「絆」と呼ぶのであれば、震災時だけではなく、友好都市としての「つながり」が元々あったからこそだと思います。地域防災についても、災害時には一人で対応できることは限られています。その時近くにいる人の協力を必要とする場面もあるはずです。日頃の何気ない会話や行事等のちょっとした「つながり」を紡いでいくことで、いざというときの「絆」となるものと信じています。

(5)

これからは大船渡市職員からも体験を伝えて (東京都板橋区)

東京都板橋区より派遣 日置 忠隆氏



外の目から見ると 「よくここまでやり遂げたな」と

中赤崎地区スポーツ交流ゾーン整備事業の計画などは、地元の人々とワークショップなど行い協働で計画の立案、また整備計画についても合意して進めていくなど大変苦労されたと思います。

被災跡地は防災集団移転促進事業で買収できた土地と買収できなかった土地の交換などで、4.2haの事業用地を確保したことは、職員が地元の人々の復興への思いに応えるために頑張って成し得たことだと思います。

大船渡市職員は約350名だと思いますが、組織での決断や事業などへの対応が非常に迅速だと感じています。

例えば、土地区画整理事業は事業認可を受けてから事業完了まで、とても時間がかかります。復興事業での区画整理だとしても、あれだけの広さの区域を6～7年で完了することは、とてもすごいと思います。

大船渡市は岩手県沿岸の中でも復興が早いと言われています。復興計画は令和2年度までの期限があり大船渡市の復興は、ほぼ完了しています。

このことは、職員の勤勉、努力、郷土愛や市民の協力で成し得たことだと思います。

実は大船渡市役所にもやりにくさが…

大船渡市役所での仕事がやりにくいこととして、事務処理の違いがあり少し戸惑いもありました。また、デジタル化を言われる昨今ですが、PCの処理速度の遅さやメールの添付ファイル、ネットの情報を直接プリントアウトできないなど不便を感じました。

大船渡での人との関わり

職員ともお付き合いさせていただきましたし、七夕まつりなどで地元の人たちとも関わる事が出来ました。大船渡の皆さんは、とてもやさしい人が多くて短い期間ではありましたが、受け入れていただきお付き合いさせていただきました。「大船渡の人は日の出とともに起きて日が沈むと寝る」と冗談で言いますが、自分は本当に夜は人が歩いていないと感じます。家庭を大事にされる人が多いのだろうという気がします。

これからは「伝える側」として 外にも出てほしい

派遣で板橋区の職員が来たということは、ひとつの縁だと思いますし、今後も交流が続いていくと思っています。以前、職員から聞いた「俺、遺体安置所の担当だった」という被災直後の体験や復興で苦労したこと、被災から復興計画の策定や地元との対応の仕方など大船渡市職員から板橋区職員に話していただける機会があってもいいと思っています。



■災害復興局で被災跡地に係る計画・設計業務にあたった



—— 応急復旧作業に従事して

東日本大震災が発生して2週間後、私は水道の応急給水班として宮城県石巻市へ派遣されていました。戦場のような光景を目の当たりにした私はそれ以来「震災復興のために何か貢献できないか」という思いが常にありました。それから4年経った平成27年、当時所属していた職場で平成28年度の災害派遣職員の募集があり、「これを逃したら復興のために貢献できる機会がなくなってしまう」と強く思ったことから志願しました。結果、災害派遣職員として採用され、大船渡市へ赴任することができました。

—— 大船渡市の高台移転に携わる中での苦勞

大船渡市では都市整備部建設課に配属になり、永浜地区、中赤崎地区、峰岸地区、三陸町浦浜地区の復興交付金事業を担当し、主に道路新設・改良工事の設計積算監督業務、関係機関協議、用地交渉などを担当させてもらいました。

平成28年度、平成29年度の2年間でいろいろと経験させてもらいましたが、当時を振り返ってみて最初に思い浮かんだのが「言葉」、即ち方言で苦勞したことです。赴任当初は地元住民からの電話に應對しても相手の言葉が理解できず、プロパーの職員に代わってもらうこともありましたし、地元住民への工事説明などに出席しても議事録が正確に書けない時もありました。苦勞といえばもう一つあります。各システムの操作方法の習得です。特に平成28年度の担当工事は、継続工事は旧積算システムで設計変更業務を行い、新規発注工事は新積算システムで設計書を作成しなければならなかったため、短時間で2つの積算システムの操作方法を習得するのに大変な労力を費やしたことを思い出します。

しかし、様々な苦勞もありましたが、地元プロパー職員が親切丁寧に指導してくれたおかげで、引継いだ工事も無事完成することができ、微力ながら復興に貢献できたことにとっても満足しています。

—— これからも交流を、
皆さんに会いに行ければ!



■建設課で主に道路新設・改良業務にあたった

残念ながら平成29年度で浜松市から大船渡市への災害派遣業務が終了してしまいましたが、私は今でも毎年大船渡市を訪問しています。盛町灯ろう七夕まつりへの参加、復興状況の確認、大好きな海釣りなどいろんな目的はありますが、お世話になった皆さんに再会するのが楽しみで毎年訪れています。今年は新型コロナウイルスの影響で訪問を自粛していますが、せっかくできたご縁を絶やさないうちこれからも交流を続けていきたいです。